

「サ詠嘆法」の文法的特質

濱中 誠

Grammatical characteristics of Sa-eitanhou Exclamatory expression ‘sa’

HAMANAKA, Makoto

1. はじめに

九州の西部に位置する4県、すなわち、福岡・佐賀・長崎・熊本の各県で用いられる方言は、肥筑方言と総称され、独特な方言事象が見受けられる点で非常に興味深い地域である。中でも暑い時期に発する「暑カ」、寒い時の「寒カ」といったカ語尾形容詞の存在は人口に膾炙している。本稿が対象とする「サ詠嘆法」は、「分布状態は、「カ」語尾形容語（ママ）のそれとほぼ一致する」と住田（1986）に報告されているが、一般にはあまり知られていない。しかも、以前より衰退が指摘されており、実態の記述が急務となっている。

「サ詠嘆法」についてのこれまでの報告には、文法的基準を統一した上で再整理を試みると、その解釈が全く異なる、対極と言えるような論考さえ含まれている（濱中2012）。なぜ、このようなことが生じるのであろうか。この疑問を解消するためには、「サ詠嘆法」の文法的特質を明らかにすることが必要である。しかし、そのためにはまず、当該事象の実態を入念に記述しておかねばならない。

本稿では、「サ詠嘆法」の実例を帰納的に整理することにより、文法的特質を明らかにする基礎資料の提示を目的としている。なお、「サ詠嘆法」の実例について、その構成語句の形式に基づいて分類整理を行っている論考はこれまでは見られないので、当該事象の実態記述の進展のため、ぜひとも行っておかなければならないことと考える。

そこで、本稿では、第2章で先行研究について概観し、第3章で実例を得た筆者の調査について概説する。さらに、第4章では「サ詠嘆法」の実例を外形的に整理し、第5章でその特質を述べたい。

2. 先行研究

「サ詠嘆法」という術語が初めて用いられたのは、九州方言学会（1969）のようである。同書10頁に、「山の非常に美しいのに感心したとき、『アン山ノウツクッサー。』のようになんかありますか。」という調査項目がある。この「アン山ノウツクッサー」のような、形容詞「美しい」の語幹に「さ」が接した「美しさ」のような形式（上例「ウツクッサー」、本稿では以下、「ーサ」と表記）を中核とした感動表出の表現法を「サ詠嘆法」という。

「サ詠嘆法」の挙例のある論考は、島原第一尋常高等小学校編（1932）が最も早いものである。そこには、「新聞がほしい」の方言訳「しんぶんのほすさー」が挙げられている。しかし、実例は当例のみであり、この表現に対する解釈等もここには加えられていない。詳細な研究史は、濱中（2012）に見られるが、これまでの「サ詠嘆法」に関する報告は、上例のような挙例

のみ、もしくは、挙例とともに簡単な解釈が加えられただけのものが多く、当該地域では自明のものとして軽んじられたのか、「-サ」の承接や「サ詠嘆法」を構成する語句の形式に従って分類整理を行い、文法的特質を明らかにしようとした論考は、少数の例外を除いてほとんど見られない。

本稿で行おうとしている、得られた実例を外形によって分類整理を試みた論考に濱中（2000）がある。この論考は、佐賀県武雄市で得られた「サ詠嘆法」の実例について概括的に報告したものである。一地域を対象にした点、カ語尾形容詞文との違いを明確にしようとした点から、挙例が少なく、バリエーションにも欠けていると言える。

同様の整理を試みるものに濱中（2002）がある。これは、熊本県下益城郡松橋町（現宇城市）で得られた実例を分析したものであるが、これも上述の論考同様、概括的記述である点、および、一地域を対象にした点で挙例が少なく、複文の実例を単文のものとは分けて挙げるなど、分類に再考が必要なものであった。

従って、本稿では「サ詠嘆法」を概括的に記述することはせず、「サ詠嘆法」の文法的特質が明らかになるよう、専ら外形によって分類整理していきたい。なお、一語文の「サ詠嘆法」については、濱中（2014）に報告がなされているため、本稿では、非一語文の「サ詠嘆法」の実例について分析する。また、「アー ウマサウマサ」や「コノ梨ノ 甘サ甘サ」のように、文末の「-サ」部分を繰り返す形式も本稿では分析対象とはしていない。これらは、「サ詠嘆法」の典型的な例とは表現的特質や話者の内省に大きな違いが見られ、稿を改めて論じたほうが良いと判断したからである。

3. 調査概要

本稿で用いるデータは、筆者自らが行った臨地調査によるものである。この調査は、1993年8月22日から2005年9月7日までの間に断続的に行われた。話者は、1895年（明治28年）生まれから1972年（昭和47年）生まれまで、福岡・佐賀・長崎・熊本の4県出身の、男性35名・女性36名の計71名である。調査方法は、調査者が標準語で例文を示し、話者が方言で答えるという、いわゆる翻訳式調査法である。なお、回答が得られたのち、「-サ」の前の助詞を他のものに替えることができるか、終助詞を下接可能かどうかなどの確認を行った。

4. 実例の整理と文法的特質

「サ詠嘆法」は、いろいろな形式で用いられるが、本章では専ら外形的に確認される客観的事実に限って述べていきたい。濱中（2014）に従い、本稿においても一語文で出現する事例を α 型、非一語文で出現する事例を β 型と仮称する。

β 型の「サ詠嘆法」の実例は、大きく2つに分けられる。すなわち、単文で現れる実例と複文で現れる実例である。単文のものを β_1 型、複文のものを β_2 型と便宜仮称する。

4.1 単文（ β_1 型）の実態

本項では β_1 型の実例を、「-サ」に前接する語句、あるいは、後接する語句にどのような特徴があるのかということに着目して整理していきたい。

まず、「-サ」に前接する語句を見てみよう。もっとも多く実例が得られたのは、先行する体言と「-サ」が接するものである。

(1) アー コノ花ノ 美ッサー。[ああ この花の 美しいこと！](K1914F) ¹

(2) アー コノ花 美ッサー。[ああ この花 美しいこと！](H1929M)

これらは、目前に咲く花の美しさに感動した時に発する感嘆の表現である。(1) では、花という体言が助詞ノを介して「-サ」に接しているのに対し、(2) では、助詞を介さずに「-サ」と接している。前者の実例は多く得られるため、 β_1 型の典型的なものと考えられるが、後者は実例の量が限られている。

4.1.1 助詞ノを介するもの

ここでは、先行する体言と「-サ」が助詞を介して接するものから整理していこう。この時に用いられる助詞には、ノ・ガ・バ・ワなどが見られる。第一に、もっとも多く例が得られる典型的と思われるものから見ていきたいが、それは上記の例(1)と同様、

(3) 貴乃花ノ 強サー。[貴乃花の 強いこと！](S1937F)

(4) アー コノ花ノ 美ッサー。[ああ この花の 美しいこと！](K1914F) = (1)

(5) オ嫁サンノ キレーサー。[お嫁さんの 綺麗なこと！](S1939F)

のように体言と「-サ」を介する助詞としてノが用いられるものである。(3) は、標準語で言えば、く活用の形容詞語幹にサが接した「-サ」と「貴乃花」とがノによって結ばれている例である。(4) は、しく活用の形容詞出自のウツクッサがノによって「花」と結ばれている例、(5) は、いわゆる形容動詞の語幹にサが接し、キレーサと「お嫁さん」とがノによって結ばれている例である。地域による多寡の差もなく、老若男女ほぼ全ての話者が用いる形式である。

肥筑方言域では、この助詞ノはンとなることも多く、

(6) 夕焼ン 赤サー。[夕焼けの 赤いこと！](S1945F)

(7) 山ン 美ッサー。[山の 美しいこと！](K1927M)

(8) アン夕陽ン キレーサ。[あの夕陽の 綺麗なこと！](K1929M)

のような実例もよく聞かれる。

このほか、上例に準ずるものとして、

(9) ワー コイノ 良サー。[わあ これの 良いこと！](S1937F)

(10) コン ウモナサー。[この 美味くないこと！](K1953M)

(11) ワー コノ 痛サー。[わあ この 痛いこと！](H1952F)

のようなものがある。(9) は、いわゆる指示詞(代名詞)コイ(これ)がノを下接し、「-サ」と接するものであり、同様の実例は4例得られた。(10)も(11)も、「-サ」にいわゆる指示詞(連体詞)が前接する例だが、指示詞の語尾にノ(ン)音があり、助詞ノを下接しないものとして特徴的である。この指示詞(連体詞)と「-サ」とが直接する実例は話者2名から得られた。しかし、例(10)(11)のような例は、出現が非常に限られているようである。

4.1.2 助詞ガを介するもの

第二に、助詞ガが体言と「-サ」とを介する例を見てみよう。助詞ガが用いられる実例は11例のみと、これも出現が限られたものである。助詞ノの実例が豊富に得られることとは対照的である。全11例を挙げれば、

(12) 赤ンボガ カワイサー。[赤ん坊の 可愛いこと！](N1951F)

(13) 夕陽ガ 赤サー。[夕陽の 赤いこと！](S1945F)

- (14) コノミカンガ ヨサ。[このみかんの 良いこと！](K1930M)
 (15) コン色ガ ヨサー。[この色の 良いこと！](N1951F)
 (16) 草取りガ メンドクササー。[草取りの 面倒くさいこと！](K1944F)
 (17) 畑ン 仕事ガ キツサー。[畑の 仕事の きついこと！](H1940M)
 (18) オナカガ 痛サー。[お腹の 痛いこと！](H1940M)
 (19) コン梅干ガ スッパサー。[この梅干しの 酸っぱいこと！](H1940M)
 (20) 夕陽ガ キレーサー。[夕陽の 綺麗なこと！](N1951F)
 (21) 夕焼けガ キレーサ。[夕焼けの 綺麗なこと！](N1932F)
 (22) オ嫁サンガ キレーサー。[お嫁さんの 綺麗なこと！](S1939F)

のようになる。「-サ」の出自の形容詞の種類に着目すると、情態形容詞出自の例が(12)(13)(14)(15)、情意形容詞出自の例が(16)、感覚形容詞出自の例が(17)(18)(19)である。「-サ」がいわゆる形容動詞出自のものもあり、その例が(20)(21)(22)となる。「-サ」の出自となる形容詞(形容動詞)の種類による出現の違いは見られないようである。地域的な差も見られない。ただし、このガが介在する形式は、1951年(昭和26年)以前生まれの話者からのみ聞かれ、それよりも若い話者からは聞かれなかったことは特筆しておきたい。

上例に準ずるものとして、

- (23) アー コレガ 良サー。[ああ この 良いこと！]
 (24) コレガ 良サー。[この 良いこと！]
 (25) (梅干しを食べて) アー コルガ スイサー。[ああ この すっぱいこと！]
 (26) (薬を飲んで) コレガ ニガサー。[この 苦いこと！](4例すべて、K1929F)

のような例が、熊本県玉名郡玉東町出身の話者一人からのみではあるが、4例得られた。これも先に述べた例と同様、指示詞(代名詞)に助詞ガが接して「-サ」に結ばれるものである。出現が非常に限られたものと言えるであろう。

4.1.3 助詞ノとガの交替

ここで少々わき道にそれるが、助詞ノとガとの交替について見ておきたい。肥筑方言域において助詞ノとガとの交替は起こりうることである。例えば、先の4例、すなわち、指示詞が助詞ガを介して「-サ」と接する実例が得られた話者(K1929F)の居住する熊本県では、助詞ノとガとは、完全に交替が可能というわけではないものの、条件が合えば交替が生じるようである。熊本県の助詞ノとガについて、秋山(1983)には、「主格助詞としては「ノ」が基本で「ガ」はまれである」とあり、続けて、「(1) 雨ノ降りジャータ(ゾ)(雨が降り出したぞ)」など3例の挙例の後、「右の三例のノがガに変わってもおかしいと言うまでではないが、ノの方が安定した表現なのである」とある。同様に、助詞ガの11例のうち4例が得られた福岡県についても、岡野(1983)には、

筑前西部南部と筑後では、主格表示に「ノ」を用いる。ただしこの地域においても、主部を強調するときは、「コッチガ ヨカ(こちらがよい)」のように、「ガ」を用いる。(80頁)

とあり、同81頁には、

「ノ(ン)」と「ガ」とはまた、全域で所有格表示に働いている。この時、「ガ」は「ノ」より劣勢で品位も低い。すなわち、「オマエガ ムスコ(お前の息子)」は「アンタノ ム

スコ」より低い待遇であり、「ガ」を用いるのは、主として男性である。ともある。「サ詠嘆法」で用いられる、体言と「-サ」とを結ぶ助詞が主格の助詞なのか所有格の助詞なのかについては、文法論上難しい問題をはらんでいるが、本稿の目的から逸れるため、ここではその解釈については保留しておきたい。とにかく、肥筑方言域では助詞ノとガとは、「サ詠嘆法」の場合でも交替可能な場合があるということを再度確認しておこう²。

その上で、体言に助詞ガが接して「-サ」に結ばれる11例と、指示詞に助詞ガが接する4例の合わせて15例について見てみよう。これらの例は、出現量の傾向から見れば「ノの方が安定した表現」(上記、秋山1983)なのであろう。実例を見ると、主部を強調した表現でもなく、待遇が関わる表現でもない。話者の性別についてみれば、例(17)(18)の2例のみ男性の話者によるものであるが、他は女性話者から得られたものである。このように、先行研究において指摘のあった助詞ガとノの交替の原則から見ても、これらの実例が非常にまれなものであるということが確認できよう。

さらに、ここで話者の内省情報についても確認しておきたい。助詞ノの実例が得られた際、話者に助詞をガに交替することができるかどうか尋ねると、少数ではあるが交替は可能であるという回答が得られた。例えば、

(27) 畑ン仕事ノ キツサー。〔畑の仕事の つらいこと！〕

(28) 畑ン仕事ガ キツサー。〔畑の仕事の つらいこと！〕(2例ともに、H1940M)

のようなものである。このような交替が可能であるとするならば、助詞ガの形で得られた実例は、ごく一部だけがたまたま記録されたのではないかと考えることもできるかもしれない。しかし、逆に、自然な発話では助詞ノが普通であるということに期せずして裏付けていることにもなろう。というのも、調査者がわざわざ、助詞をガに替えることができないかと確認しなければ、助詞ガの実例はほとんど得られることがないからである。

また、このときに、助詞ノをガには替えられないとする話者も複数いる。例えば、

(29) (内省) (助詞が) ガのときには、タッカを使う。(H1931M)

というような回答が得られるが、これは、「値段ノ 高サー」という実例が得られたときに、「この助詞ノをガに替えることはできますか」と尋ねた際の回答である。つまり、当該話者の内省では、「値段ガ 高サー」は不自然な文となるのである。同様に、

(30) (内省) 良サのときには (助詞は) ノしか使わない。(K1936M)

という回答も得られた。これは、「コン (この) 色ワ 良カ」と「コン色ガ 良カ」とは、助詞のワとガとが入れ替えられるけれども、「良サ」に結ぶときには助詞はノしか使わないという内省による回答である。すなわち、「コン色ワ 良サ」も「コン色ガ 良サ」もどちらも不自然であるとのこと話者は内省しているのである。

このように、実例の出現の様相から見ても、話者の内省情報から見ても、体言に助詞ガが接して「-サ」に結ぶ実例は、「サ詠嘆法」の標準的な典型例ではないと言えよう。

4.1.4 助詞バを介するもの

第三に、助詞バが体言と「-サ」とを介する例を見てみよう。助詞バが用いられる実例は、ガに次いで多く得られたものではあるが、しかし、実例は話者3名からの9例のみと、ガ同様、出現が限られたものとなる。そして、その全てが佐賀県内で、しかも、武雄市で得られた1例(33)以外は、藤津郡太良町で得られたということは注意すべきであろう。全9例を挙げれば、

- (31) 冷タカ ビールバ 飲ミタサー。[冷たい ビールを 飲みたいこと！](S1930M)
 (32) 冷タカ ビールバ 飲ミタサー。[冷たい ビールを 飲みたいこと！](S1971F)
 (33) ノドガ 渴イタナーイ。水バ 飲ミタサー。[喉が 渴いたね。水を 飲みたいこと！]
 (S1934M)
 (34) オ母サン、オ菓子バ 食イタサー。[お母さん、お菓子を 食べたいこと！](S1930M)
 (35) オ茶漬ケバ 食ベタサー。[お茶漬けを 食べたいこと！](S1930M)
 (36) 久シブリニ 映画バ 見タサー。[久しぶりに 映画を 見たいこと！](S1971F)
 (37) 映画バ 見タサー。[映画を 見たいこと！](S1971F)
 (38) ハヨー 続キバ 見タサー。[早く (番組の) 続きを 見たいこと！](S1971F)
 (39) 夏ラシカ 音楽バ 聞キタサー。[夏らしい 音楽を 聞きたいこと！](S1971F)
 のようになる。ビールや水といった体言がいわゆる対象語格を示す助詞のバを介して希望の助動詞タイにサが接した「-サ」に結ばれるものである。

この対象語格を示す助詞は、バではなくノ(ン)で現れることもあり、

- (40) ビールン 飲ミタサー。[ビールの 飲みたいこと！](H1940M)
 (41) ビールン 飲ミタサー。[ビールの 飲みたいこと！](K1959M)
 (42) 水ノ 飲ミタサネー。[水の 飲みたいことねえ！](K1944F)
 (43) 自由ニ 使ワル オ金ノ 欲ッシサー。[自由に 使える お金の 欲しいこと！]
 (S1937F)

のように、福岡県久留米市や熊本県山鹿市・水俣市、佐賀県佐賀郡大和町(現佐賀市)では助詞ノ(ン)を介して体言が「-サ」に結ばれる実例が得られた。助詞ノとガとについて交替が起こりうることは先述したが、「サ詠嘆法」とともに用いられる対象語格を示す助詞に限って言えば、交替はできないようである。すなわち、「ビールガ 飲ミタサ」というような実例は得られなかった。なぜ佐賀県内の武雄市と藤津郡太良町では助詞バが用いられ、その他の地域で用いられないのかについて、および、なぜ対象語格を示す助詞にガが用いられないのかについては、データが少なくよくわからない。「欲シカゴター」のような、希望を表す際のゴタルを用いた表現法の使用の有無や、対象語格を示す助詞に何を使うのか、といったことが影響するものと思われるが、理由の解明には今後の報告を俟ちたい。

4.1.5 助詞ワを介するもの

第四に、体言と助詞ワが「-サ」に結ぶ例を見てみよう。助詞ワが用いられる実例は、話者14名からの38例のみと、上述のガ・バ同様、出現は限られている。実例の一部を挙げれば、

- (44) アー コン梅ワ スイサー。[ああ この梅は すっぱいこと！](K1919F)
 (45) 今日ノ 夕陽ワ 美ッサー。[今日の 夕陽は 美しいこと！](K1919F)
 (46) アンタワ 上手サー。[あなたは 上手なこと！](K1959M)

のようになる。

ここで注意すべきは、話者の内省情報についてである。助詞ノの実例が得られた際、調査者は話者に助詞をワに交替することができかどうか尋ねているが、多くの話者が交替は不可能であると回答する。例えば、「コノ犬ノ オソロッサ」[この犬の 恐ろしいこと！]という例が得られたときに、調査者が「犬ノのの代わりにワは使えますか」と尋ねると、

- (47) (内省) ワは用いない。(K1940F)

という内省情報が得られる。すなわち、「コノ犬ワ オソロッサ」は非文であるという認識である。このような助詞ワの不使用の情報は、複数の話者から得られるものである。同様に、

(48) コン魚 (イオ) ノ ウマサー。[この魚の 美味しいこと!]

(49) コン魚 (イオ) ワ ウマカ。[この魚は 美味しい。](2例ともに、K1936M)

(50) コノ薬ノ ニガサー。[この薬の 苦いこと!]

(51) コノ薬ワ チョット ニガカバイ。[この薬は とっても 苦いよ。](2例ともに、S1940M)

のように、「サ詠嘆法」の時には (48) (50) のように助詞ノが用いられ、助詞をワにするとその時には (49) (51) のようにカ語尾形容詞文になるというような使い分けの意識が、複数地点で確認される。かつて、「サ詠嘆法」と助詞ワとの共起について、「ワの後に「-サ」がくることはない。話者の内省によると、「-サ」の前にワが来ることは有り得ないようである」(濱中 2000、佐賀県武雄市の記述)とあり、「ワ」が用いられると必ず「-カ」がこれを受ける。「-サ」が受けることはない。注目すべき差異である」(濱中 2002、熊本県下益城郡松橋町(現宇城市)の記述)とも指摘されている。上述の実態もこの見解を支持するものとする。詳細な検討は他日を期したいが、上記の区別は、「サ詠嘆法」の文法的特質を表す重要な情報と考えられよう。

4.1.6 助詞を介さないもの

先行する体言と「-サ」が助詞を介さずに接する例について見てみよう。助詞を介さずに接する実例は 17 例のみと、これも出現が限られたものである。助詞ノを介する実例が豊富に得られることは対照的である。全 17 例を挙げれば、

(52) 赤チャン カワイサー。[赤ちゃん 可愛いこと!](S1937F)

(53) コノ犬 カワイサー。[この犬 可愛いこと!](H1940M)

(54) コン川 キシャナサー。[この川 汚いこと!](K1936M)

(55) ワー コノリンゴ 赤サー。[わあ このりんご 赤いこと!](S1937F)

(56) コノ布団 厚サー。[この布団 厚いこと!](S1937F)

(57) アノ車 危ナサー。[あの車 危ないこと!](K1969F)

(58) アー コノ花 ウツクッサー。[ああ この花 美しいこと!](H1929M)

(59) マ コノ赤チャン アイラッサー。[まあ この赤ちゃん 愛らしいこと!](H1922M)

(60) コノ赤チャン ヤーラシサー。[この赤ちゃん 愛らしいこと!](S1971F)

(61) ホント コノ子 ムゾラシサー。[ほんとうに この子 可愛らしいこと!](K1943F)

(62) コノ人形 ムゾラッサー。[この人形 可愛らしいこと!](K1938M)

(63) アン人 押し付ケガマッサー。[あの人 押し付けがましいこと!](K1940F)

(64) コノ家 立派サー。[この家 立派なこと!](S1937F)

(65) コン花 キレーサ。[この花 綺麗なこと!](K1953M)

(66) アンタ 器用サー。[あなた 器用なこと!](S1945F)

(67) 水 飲ミタサー。[水 飲みたいこと!](S1937F)

(68) アー 今 ビール 飲ミタサー。[ああ 今 ビール 飲みたいこと!](S1937F)

ようになる。(52) から (57) は、情態形容詞語幹にサが接してできた「-サ」と体言が結ばれている例である。(58) から (63) は、情意形容詞出自の「-サ」と体言が結ばれている例、(64)

(65) (66) は、いわゆる形容動詞の語幹にサが接してできた「-サ」と体言とが結ばれている例である。(67) (68) は、動詞にいわゆる希望の助動詞「たい」がついた形容詞相当の語の語幹にサ

が接した「-サ」と体言が結ばれている例である。形容詞（形容動詞）の種類にも差はなく、長崎県では実例が全く得られなかったが、その他は地域による多寡の差もなく用いられている。

このほか、上例に準ずるものとして、

(69) アー コレ メズラシサー。[ああ これ 珍しいこと！](N1933F)

のようなものがある。これは、いわゆる指示詞（代名詞）コレが「-サ」と直接するものであり、1例のみ得られた。

似たような形式のもの、すなわち、

(70) コラ 良サー。[これの 良いこと！](K1929F)

(71) アー コリヤ ウツクッサー。[ああ これの 美しいこと！](H1922M)

(72) コラー ウツクッサー。[これの 美しいこと！](K1938M)

(73) ソラー 良サー。[そのの 良いこと！](K1938M)

のような実例も得られた。これは、「-サ」にいわゆる指示詞（代名詞）が前接する例だが、指示詞の語尾が助詞と融合していると推測されるものである。得られた実例は4例のみである。これらは、出現が非常に限られたものと言えるであろう。

この他、体言の語尾が助詞と融合していると推測される実例、すなわち、

(74) コノ クワシャー メズラッサ。[この 菓子の 珍しいこと！](K1927M)

(75) アンター キヨサー。[あなたの 器用なこと！](K1935F)

(76) アンタ（あなた）ガタ（方）ン 庭一 良サー。[あなたの家の 庭の 良いこと！](S1945F)

のようなものも3例だけではあるが得られた。これらは、もし助詞との融合が認められるのならば、その融合した助詞はなんなのか、という点は、得られた実例が3例と少ないため、現在のところは不明と言わざるを得ない³。

以上、ここまでは、もっとも多く実例が得られた、先行する体言と「-サ」が接するものについて見てきた。体言と「-サ」が接する時には2つの形式があり、一つは助詞を介して接するもの、もう一つは助詞を介さないものであった。助詞を介するものの方が典型的な形式で、中でも助詞ノを用いるものももっとも典型的なものである。他に助詞ガ・バ・ワなどが用いられることもあるが⁴、助詞ノ以外の実例は得にくいことが明らかになった。また、助詞を介さないで体言と「-サ」とが接する実例も得られはするものの、実際には得にくいことが明らかになった。

4.1.7 体言以外が前接するもの

ここでは、体言以外の語句が「-サ」に前接するものについて見てみよう。もっとも多く見られたのは、程度を表す副詞が前接するものである。なかでも「とても、たいへん、非常に」の意味の「チョット（チョーット）」が用いられることが多い。例えば、

(77) チョット 暑サー。[とても 暑いこと！](S1934M)

(78) (値段を見て) チョット 高サー。[とても 高いこと！](S1970M)

(79) チョーット 高サー。[とっても 高いこと！](S1940M)

のような実例である。標準語で「ちょっと」と言えば「少し」の意味であるが、ここに用いられた「チョット」は全て「とても、たいへん、非常に」の意味である。「チョット」のような短呼の実例が話者4名から7例、「チョーット」のように長呼する実例が話者2名から4例得られた。

次に多く見られたのは、「エライ」が用いられたものである。「エライ」も程度を表す副詞で「と

でも、たいへん、非常に」の意味であるが、

(80) エライ 高サー。[とても 高いこと！](S1940M)

のような実例が得られた。佐賀県武雄市の話者3名から1例ずつ、長崎県西彼杵郡長与町の話者1名から1例、琴海町（現長崎市）の話者1名から3例の合計7例が得られた。

さらに、「ヨッポド」が用いられた実例、すなわち、

(81) アー ヨッポド ウツクッサー。[ああ とても 美しいこと！](K1938M)

のような例が、熊本県鹿本郡植木町（現熊本市）の話者一人から他に2例、計3例が得られた。「ヨッポド」も程度副詞で「とても、たいへん、非常に」の意味である。

(82) オットロシカ フトサー。[とても 大きいこと！](N1923M)

のように「オットロシカ」が用いられることもある。これは2例得られた。ここで用いられている「フトサ」は、大きいを意味する「フトカ」の語幹にサが接した形式である。長崎県諫早市の同話者からは、

(83) トーロシカ フトサー。[とても 大きいこと！](N1923M)

という類似の実例も得られた。また、諫早市（旧小長井町）の別の話者からは、

(84) オットロシ 高サー。[とても 高いこと！](N1924M)

という例も得られた。上例の「オットロシカ」も「トーロシカ」も「オットロシ」も、全て「とても、たいへん、非常に」の意味である。

これより下に実例を挙げるのは、全て程度副詞が「-サ」に接するものだが、現在のところ実例が1例ずつしか得られていないものである。例えば、

(85) ドガンデン セカラシサー。[とても うるさいこと！](S1937F)

の実例は、佐賀県の武雄市の話者から得られたものである。「セカラシサ」は、「うるさい」を意味する形容詞「セカラシカ」にサが接した形式である。この他、実例が1例しか得られなかったものとしては、

(86) ヒドー 高サー。[とても 高いこと！](N1927M)

(87) イッキオイカ 早サー。[とても 早いこと！](S1930M)

(88) ホンナコテ ニガサー。[とても 苦いこと！](K1938M)

(89) マッコテ 高サー。[とても 高いこと！](K1953M)

(90) ゴーギナ マブッサー。[とても まぶしいこと！](K1929M)

(91) モノスゴー 高サー。[とても 高いこと！](K1935F)

(92) タツマガルゴト カワイサー。[驚くくらい 可愛いこと！](H1952F)

ようになる。「ヒドー」「イッキオイカ」などの程度副詞は、どれも「とても、たいへん、非常に」の意味である。(92)は、様態を表すいわゆる助動詞相当の語であるゴタルが「-サ」に直接する実例である。ゴタルの連用形相当の形式ゴトが接している。これも、「驚くくらい」という程度を表しており、ここでは副詞として用いられている、もしくは、副詞化している表現と言えるだろう。

ここまで見てきた実例は、ほぼ程度副詞と「-サ」の2語のみからなるものであった。ここからは、得られた実例としては少数だが、程度副詞と「-サ」以外の語を含んだ実例を見ていこう。この形式の実例は、

(93) 野菜ン チョット 高サー。[野菜の とても 高いこと！](S1970M)

(94) 野菜ン エライ 高サー。[野菜の とても 高いこと！](S1970M)

- (95) 大根ノ エライモン 高サー。[大根の とても 高いこと！](K1953M)
 (96) アン(あの) ワレ(お前) シ ナンデン クワッサ。[あの人の なんでも 詳しいこと！](K1929M)
 (97) 今日ワ エライ スクサー。[今日は とても 暑いこと！](S1939F)
 (98) アン人ワ ホンニ 器用サ。[あの人は 本当に 器用なこと！](K1938M)

の6例だけが得られた。ここに挙げた程度副詞の「チョット」「エライ」「エライモン」なども全て「とても、たいへん、非常に」の意味である。これらは、「サ詠嘆法」の典型的な、体言が助詞ノを介して「-サ」に結ぶ例の、体言と「-サ」との間に程度副詞が挿入されたものと見ることができる。(96)の「ナンデン」は「なんでも」の意味だが、これも程度を表す副詞である。「あの人はなんでも詳しい」ということを詠嘆的に表現している。(97)の「スクサ」は、「不快なくらい暑い」という意味の「スクカ(スッカ)」にサが接した形式である。(97)(98)の2例は、体言に助詞ワが接している点で珍しい。

ここで同時に見ておきたいのが、次のような実例、すなわち、

- (99) モノスゴー 足ノ ハヤサー。[とても 足の 速いこと！](N1951F)
 (100) マコテ コン子ノ セカラッサ。[とても この子の うるさいこと！](K1953M)
 (101) エライ 字ガ 美シサ。[とても 字が 美しいこと！](N1951F)
 (102) エライ コン大根 高サー。[とても この大根 高いこと！](N1931F)
 (103) エライ コノ大根 高サー。[とても この大根 高いこと！](N1931F)
 (104) オットロシカ コノオ茶 アッタサー。[とても このお茶 熱いこと！](N1923M)
 (105) チョット 今日 寒サー。[とても 今日 寒いこと！](S1937F)

のような7例である。「モノスゴー」も「マコテ」も「とても、たいへん、非常に」を意味する語である。これらは、副詞と「-サ」とが直接せず、副詞が前に出た形であるが、上に挙げた(93)から(98)までの例に類似の構造、すなわち、「サ詠嘆法」の典型的な例を程度副詞が修飾する構造を持つものと考えられる。

ここまで見てきたように、肥筑方言域では、程度副詞として多様な語が用いられていることがわかる。さらに、形式はそれぞれの地点によって異なるものの、程度副詞と「-サ」とが共起する現象が各地で見られることは注目に値する。詳細な文法論的分析は後稿を俟ちたいが、これも「サ詠嘆法」の文法的な特質を示す重要な情報と言えよう。

4.1.8 後接する語句

次に、「-サ」に後接する語句を見てみよう。「-サ」に後接する語句は限られている。数はあまり多くはないものの、いわゆる文末助詞が後接する実例が複数得られた。実例の多く得られたものから順に見ていこう。

まず、もっとも多かったのは、「-サ」に文末助詞ヤが接するもの、すなわち、

- (106) コンセーターノ 良サヤ。[このセーターの 良いことよ！]
 (107) コン魚(イラ)ノ ンマサヤ。[この魚の 美味しいことよ！]
 (108) 今日ノ 暑サヤ。[今日の 暑いことよ！](3例ともに、K1936M)

のようなものである。「-サ」に後接する助詞ヤは、どれも感動を表している、話者は内省している。実例の8例すべてが、人吉市の1人の話者から得られたものである。

助詞ヤの実例数と同じ8例得られた助詞ナについて見てみよう。これは4名の話者から得られ

たものだが、

(109) アナタノ 手ノ先ノ キヨサナー。[あなたの 手先の 器用なことね!](K1895F)

(110) コン着物ン 良サナー。[この着物の 良いことね!](K1944F)

(111) コン色ン 良サナー。[この色の 良いことね!](K1935F)

のように用いられる。この助詞ナーはすべての例において、聞き手に向かって用いられる、もしくは、同意を求めるように用いられるというように話者には認識されている。

この文末助詞ヤとナーとが重ねて用いられた実例、すなわち、

(112) 速サヤナー。[速いことよね!](K1936M)

というものも1例のみだが得られた。文末助詞が重なって用いられている実例は、これのみである。話者の内省によれば、「速サヤ」までが感動を表し、「ナー」は聞き手に向かって発せられるとのことである。

次に「-サ」に助詞ネが接する実例だが、これは3名の話者から6例得られた。

(113) 手先ノ 器用サネー。[手先の 器用なことね!](K1944F)

(114) エライ 外ワ 寒サネー。[とても 外は 寒いことね!](N1951F)

(114) には、副詞エライが用いられ、さらに助詞ワが「-サ」に前接しており、非常に特殊な例であると言えよう。これらの助詞ネも、聞き手に向かって使うと、話者には意識されている。

さらに助詞ヨが用いられた実例を見てみよう。

(115) コノ部屋ノ ヌクサヨー。[この部屋の 暑いことよ!](K1927M)

(116) アー ヌクサヨー。タマランバイ。[ああ 暑いことよ! 我慢できないよ。](N1921F)

これらは、3名の話者から1例ずつ、計3例が得られた。この助詞ヨについては、感動を表すものの、聞き手に向かって用いるというような認識は話者にはないようである。

以上、「-サ」にいわゆる文末助詞が後接する実例について見てきたが、用いられる助詞は、ヤ・ナ・ネ・ヨの4種だけ、全実例を合計しても26例のみと非常に限られたものである。ここにも「サ詠嘆法」の文法的・表現的な特質が現れていると考えられる。これは、話者による内省情報においても確認でき、例えば助詞ナについて、

(117) (内省)「暑サナー」の「ナー」は、ひとりの時には付かない。(K1936M)

というものがある。これは、聞き手がない独白の時には助詞ナは使わないということであり、逆に言えば、上述の通り、ナは聞き手目当ての助詞であるということである。本稿は表現的特質を明らかにするものではないので、深くは踏み込まないが、例えば同じ助詞ナについて、

(118) (内省)「良カナー」とは言うが、「良サー」にナは絶対に付かない。(S1934M)

というような内省情報もある。これは、助詞ナは聞き手目当ての助詞であること、「サ詠嘆法」は聞き手目当ての表現ではないことから共起しないという話者の内省情報である⁵。

上述した聞き手目当ての助詞ネについても同様な指摘があり、例えば、

(119) (内省)「暑カネー」とは言うが、同意を求めるように「暑サネー」とは絶対に言わない。(S1934M)

というような内省情報も複数の話者から得られた。このような内省情報が複数の話者から聞かれ、実例を見ると圧倒的少数の実例でしか文末助詞が「-サ」とともに用いられていない事実を重く見れば、「サ詠嘆法」と文末助詞との共起は非常にまれであると結論することができよう⁶。

以上、単文で用いられた「サ詠嘆法」β₁型の実態を見てきた。「-サ」に前接する語句には、

体言と副詞との2種があることがわかった。体言が前接する場合、助詞を介するものと、助詞なしで接するものがある。助詞を介在する場合には、助詞ノを用いるものが典型的と見られ、实例は得にくいものの、助詞ガ・バなどが用いられることもあることがわかった。助詞を介さないで体言と「-サ」が直接する实例もあることはあるが、これも得られにくい形式であることが明らかになった。体言以外が前接する場合、ほとんどが「とても、たいへん、非常に」の意味の程度副詞である。

「-サ」に後接するのは、文末助詞に限られるが、「サ詠嘆法」の实例を見るとこの文末助詞を後接しないものの方が圧倒的に多く、また、話者からも「-サ」には後接する語はないとする内省情報が多く得られ、「-サ」で終止する形が「サ詠嘆法」の典型であることが明らかになった⁷。

次節では、複文で用いられた「サ詠嘆法」 β_2 型について、得られた实例を整理していきたい。

4.2 複文 (β_2 型) の実態

次に β_2 型の实例について見てみよう。複文は先行句と後行句とに分けられるが、先行句に「サ詠嘆法」が含まれている例は存在せず、すべての例で「-サ」は後行句に含まれている。 β_2 型の实例を整理するにあたり、複文を3種、すなわち、有属文・合文・重文に分けて考えたい。なお、これら3種の定義は山田孝雄『日本文法論』に従う。

4.2.1 有属文で現れるもの

まず、 β_2 型のうち、有属文の实例を整理していこう。もっとも多く实例が得られたのは、

- (120) 誰モ オラントノ サミシサー。[「誰も いないの」の さみしいこと!](K1959M)
- (121) 走ットノ ハヤサー。[「走るの」の 速いこと!](K1936M)
- (122) 赤チャンノ 笑ウトノ カワイサー。[「赤ちゃんが 笑うの」の 可愛いこと!](S1971F)
- (123) 草ムシットノ セカラシサー。[「草むしるの」の 面倒くさいこと!](S1937F)
- (124) 広カ庭ノ アットノ ウラヤマシサー。[「広い庭が あるの」の うらやましいこと!](S1971F)
- (125) ビールノ 冷エタトノ 飲ミタサー。[「ビールの 冷えたの」の 飲みたいこと!](S1971F)

のように、「トノ」を介して先行句と後行句「-サ」とが接するものである。「トノ」のトは、「トプトノハヤカ(飛ぶのが早い)」(小野志真男 1983)のように肥筑方言域で広く用いられる準体助詞である。(120)「オラントノ」は標準語の「いないの(いないことの)」に相当する。(123)「草ムシットノ」は「草(を)むしるの」である。セカラシカはここでは「めんどくさい」の意味で用いられている。この「トノ」の实例は、4名の話者から10例得られた。(120)が人吉市、(121)が水俣市で得られた例で、これ以外はすべて佐賀県内のものである。中でも藤津郡太良町では全体の半分の5例が得られたことは注意すべきであろう。

次に多く实例が得られたのは、

- (126) 走ットン ハヤサー。[「走るの」の 速いこと!](K1895F)
- (127) 犬ノ 吠エタトノ オトロッサ。[「犬が 吠えたの」の 恐ろしいこと!](K1929M)
- (128) 誰モ オラントノ サミシサー。[「誰も いないの」の さみしいこと!](K1959M)

のような「トン」の例である。实例は6例得られたが、うち4例は熊本県内で、2例は上述の太良町で得られたものである。

最後に「トガ」の用いられた实例を見よう。これは、

(129) 走ットガ ハヤサー。[「走るの」の 速いこと！]

(130) 草ムシットガ セカラシサー。[「草むしるの」の 面倒くさいこと！]

(131) 赤チャンノ ワリヤーヨンサットガ カワイサー。[「赤ちゃんが 笑うの」の 可愛いこと！](3例すべて、S1937F)

のようなもので、3例すべて佐賀郡大和町（現佐賀市）の話者から得られた。ほかの話者からは全く聞かれなかった。(131)「ワリヤーヨンサットガ」は、「笑いよりなざるのが」に相当するかと思われる。

このように、有属文の实例は「トノ」「トン」「トガ」の3種、計19例が得られたが、「サ詠嘆法」の实例全体からすると得にくいものである。話者の意識としては、

(132) カワイサーの後になにも続かない限り、カワイサーの前が長くても、どんな助詞が来ても用いることができる。(S1937F)

ということであるが、实例を見ると有属文の实例は得にくく、中でも上述の「トガ」が前句と後句とを結ぶもののように特に僅少なものもある。ここにも何らかの文法的な制約があると推測される。

4.2.2 合文で現れるもの

次に合文の主句に「サ詠嘆法」が用いられるものについて見てみよう。ここに分類される实例は2種ある。一つは、合文の主句が「サ詠嘆法」の一語文（ α 型）相当のもの、もう一つは、合文の主句が非一語文（ β 型）相当のものである。

主句が α 型相当のものとしては、

(133) 天気ン 良カケン スクサー。[「天気が 良いので 暑いこと！】(H1952F)

(134) 広カ庭ノ アッケンガ ウラヤマッサー。[「広い庭が あるから 羨ましいこと！】(S1937F)

(135) 品モンワ 良カバッテン 高サー。[「品物は 良いけれども 高いこと！】(K1944F)

(136) ココワ イーケドモ 高サー。[「ここは 良いけれども 高いこと！】(K1944F)

のような例が得られた。(133)は接続助詞ケンで主句と伴句とが結ばれているが、同様に「ケン」が用いられる实例が他に3例得られた。(134)は接続助詞ケンガが用いられているが、他に3例の实例が得られた。ケンもケンガも順接で理由を表しており、標準語のので・からに相当する。(135)は接続助詞バッテンが、(136)は接続助詞ケドモがそれぞれ用いられているが、得られたのはそれぞれ1例のみである。バッテンもケドモも逆接で、だけど・けれどもの意味を表している。

主句が β 型相当のものとしては、

(137) 品モンナ 良カバッテン 値段ノ 高サー。[「品物は 良いけれども 値段の 高いこと！】(K1927M)

(138) 品モナー 良カイドン 値段ノ 高サー。[「品物は 良いけれども 値段の 高いこと！】(K1936M)

(139) 品ワ 良カケド 値段ノ 高サー。[「品は 良いけれども 値段の 高いこと！】

(H1971M)

(140) チットバッカ 寒カバッテン 気持チン 良サ。[少しばかり 寒いけれども 気持ちの
良いこと!](H1929M)

のような例が得られた。すべて逆接の接続助詞が用いられ、主句は、 β 型の典型例と同じ、体言
に助詞ノ(ン)が下接し「-サ」に結ばれる形式である。この他、

(141) オヒサンノ ヘーラシタバッテン マダ アツァー。[お日さんが 沈んだけれども
まだ 暑いこと!]

(142) 陽ワ 沈ンダバッテン マダ アツァー。[陽は 沈んだけれども まだ 暑いこ
と!](2例ともに、H1931M)

のように、主句がマダという副詞と「-サ」だけの形式の実例が、この2例のみであるが、得ら
れた。

4.2.3 重文で現れるもの

最後に重文の下句に「サ詠嘆法」が用いられているものについて見てみよう。得られた実例は
すべて下句が α 型相当のものである。上句末には、接続助詞のテがすべての例で見られ、上句は
下句の理由となっている。複数の例が得られたものとしては、

(143) アータト オーテ ウレッサー。[あなたと 会って 嬉しいこと!](K1927M)

(144) ワ コギャン残シテ モッタイナサー。[わあ こんなに残して もったいないこと!]
(K1927M)

(145) 広カ庭ノ アッテ ウラヤマッサー。[広い庭が あって 羨ましいこと!](K1927M)

(146) 広ーシテ 良サー。[(庭が) 広くって 良いこと!](K1914F)

(147) インノ吠エテ オソロッサー。[犬が吠えて 恐ろしいこと!](K1927M)

(148) 蠅ノ来テ セカラッサ。[蠅が来て うるさいこと!](K1927M)

がある。(143)は、「あなたと会えてうれしい」ということを詠嘆的に表現した例である。「会え
てうれしい」に相当する実例としては、「オーテ ウレッサー」が6例、「会エテ ウレッサー」
が1例、「会エテ ウレシサー」が1例得られた。(144)のコギャンは「こんなに」の意である。
この他に「残シテ モッタイナサー」の実例が他に3例得られた。(145)と同様の「アッテ ウ
ラヤマッサー」は他に3例、「アッテ 良サー」が1例得られた。(146)と同様の「広ーシテ 良
サー」も他に1例得られた。(147)は、「犬が吠えて恐ろしい」ということを詠嘆的に表現したも
ののだが、「吠エテ オソロッサー」が他に1例、「吠エテ オトロッサー」が1例、「吠エテ エッ
サー」が1例得られた。(148)のセカラシカは、標準語の「うるさい」の意だが、「来テ セカ
ラッサ」が他に1例、「ブンブンユエテ ヤカマシサー」[ブンブンいって うるさいこと!]が1
例得られた。

この他、1例ずつのものとして、

(149) アガン スピード出シテ 危ナサー。[あんなに スピード出して 危ないこと!]
(S1934M)

(150) 今日ワ 川ノ水ノ 濁ッテ 汚サー。[今日は 川の水が 濁って 汚いこと!]
(K1927M)

(151) 試合ニ 負ケテ ハガイサー。[試合に 負けて はがゆいこと!](S1971F)

のようなものが得られた。(149)アガンは「あんなに」の意、(151)ハガイカは「はがゆい」の意

である。

以上、複文で用いられた「サ詠嘆法」 β_2 型の実態を有属文・合文・重文に分けて見えてきた。有属文の実例は準体助詞のトに助詞ノ(ン)・ガが下接した「トノ」「トン」「トガ」の3種が前句と後句とを結ぶ実例が見られた。合文は、主句が α 型のもの β 型のものに分けられるが、どちらも、理由を表すケン・ケンガ、逆接のバツテン・イドン・ケドのような接続助詞が前句と後句とを結んでいた。重文は、上句末に接続助詞のテがすべての例で見られ、すべての例で下句は α 型となっていた。上句は下句の理由に当たっていることが明らかになった。

5. おわりに

本稿では、「サ詠嘆法」の実例を帰納的に整理することにより、「サ詠嘆法」の文法的特質を専ら外形的に明らかにしてきた。「サ詠嘆法」は、一語文で現れる α 型と非一語文で現れる β 型とに分けられるが、このうち本稿で取り上げた β 型は、単文の β_1 型と複文の β_2 型とに細区分できた。

β_1 型は、実例の豊富に得られる形式である。まず、前接する語句について見ると2種に分けられ、ひとつは体言が前接するもの、もうひとつは程度副詞が前接するものであった。体言は助詞ノを介して「-サ」に結ばれることが圧倒的に多く、助詞ガ・バ・ワなどの例も非常に限定的ではあるが聞かれた。また、助詞を介さずに体言が「-サ」に結ばれる例も、少数ではあるが存在した。

次に後接する語句について見ると、文末助詞ヤ・ナ・ネ・ヨの4種のみが出現した。これらも全実例数26例と、非常に限られたものである。聞き手目当てであったり、同意を求めるような文末助詞については、「サ詠嘆法」との共起は起こりにくいことが、得られた実例数からだけではなく、話者の内省情報からも明らかになった。

β_2 型は、有属文・合文・重文に分けてその実態を見てきた。有属文の実例としては、準体助詞トに助詞ノ(ン)・ガが下接した「トノ」「トン」「トガ」の3種が前句と後句とを結ぶ実例が見られたが、どれも実例は得にくかった。合文は、主句が α 型のもの β 型のものであったが、理由を表すケン・ケンガ、逆接のバツテン・イドン・ケドのような接続助詞が前句と後句とを結んでいた。 β 型のもは、 β_1 型の典型例と同じ、体言に助詞ノ(ン)が下接し「-サ」に結ばれる形式がほぼ全てであった。合文の全実例数も10数例であり、非常に得にくいことは同様である。重文は、上句末に接続助詞のテがすべての例で見られ、下句はすべて α 型であった。上句は下句の理由を示していたが、やはり全実例を合わせても20例ほどと、非常に得にくいことが明らかになった。

本稿では、第1章に述べたように、「サ詠嘆法」の文法的特質を明らかにすべく、その第一段階として、筆者自身が行った臨地調査によって得られた実例を解釈や理論にはあえて踏み込まずに専ら外形的に整理し、基礎資料を提示した。しかし、「サ詠嘆法」の本質の解明には、このような基礎的作業が不可欠であろう。なぜなら、少数の事例から独断的な理論を導くことがあってはならないと考えるからである。

本稿の結果を踏まえて、今後は文法論的領域にも視野を広げ、当該事象の本質解明を目指すことを今後の課題としたい。

注

1. 実例の後ろの〔 〕内に、標準語訳を付した。なお、本稿で用いた術語「標準語」は、真田(2000)によるものである。「サ詠嘆法」は、感動した時に発する感嘆の表現であるため、カ語尾形容詞による通常の表現とは、話者の表現意識に明らかな違いが確認される。そのため、本稿の標準語訳では「～こと！」に文末を統一し、詠嘆を表すこととした。標準語訳に続けて、話者情報を付した。例(1)には、「(K1914F)」とあるが、これは熊本県「K」1914年生まれ的女性「F」を表している。これ以外のローマ字は、福岡県「H」佐賀県「S」長崎県「N」、男性「M」をそれぞれ表す。
2. 肥筑方言域で用いられる主格・所有格を表す助詞ノとガとは、交替できるものであるということを踏まえ、実例に対する標準語訳は「の」で統一した。
3. 例(70)(71)(72)は「これ」、例(73)は「それ」、例(74)は「菓子」、例(75)は「あんた」、例(76)は「庭」と、それぞれ何らかの助詞が融合したものと推測される。本文中に記したように助詞の何が融合しているのかは不明であるので、「ガ」が融合したものと想定して標準語訳を付した。
4. 体言と「-サ」を結ぶ際に、助詞ナが用いられることがある。得られた実例は、
 (152) アノ オバチャンナ コワサー。〔あの おばちゃんの 怖いこと！〕
 (153) コン 赤チャンナ カワイサー。〔この 赤ちゃんの 可愛いこと！〕(2例ともに、K1969F)
 の2例のみである。どちらの例も熊本県荒尾市の女性話者1名から得られたものである。この助詞ナは、先行研究によれば八代市で類似した助詞の使用の報告があり、白石(1983)に「オッサンナ ナンバ ツリオラス ト。(少男→中男)おじさんは、何を釣っているの。」という例が見られる。このほか「トチャンナ」「アンチャンナ」の例も見られる。当該論文ではオッサンナが「おじさんは」と標準語訳されているが、「サ詠嘆法」にはワは非常に用いられにくいことを鑑みると上例の助詞はワではなく助詞のガ・ノの音変化形などである可能性も否定できない。管見の限りではあるが、この助詞ナについての詳細な報告はなされていないようである。従って、この助詞ナについての分析は、今後の課題としたい。
5. (118)(119)の内省情報は、濱中(2014)の再掲である。濱中(2000・2002)にも同様の報告がある。
6. この他、文末に助詞ワが接する例がある。これは、福岡県三井郡北野町(現久留米市)出身の一人の話者から3例のみ得られたものだが、
 (154) ドーノ コン赤サワ。〔ああ、この赤いこと！〕
 (155) ドーノ コンフトサワ。〔ああ この大きいこと！〕
 (156) ドーカ コノ 痛サワ。〔ああ この 痛いこと！〕(3例すべて、H1952F)
 のようなものである。ここで用いられている「ドーノ」も「ドーカ」も、話者によれば特別な意味はなく、アーとかマーとかと同じであるとのことであるが、「この赤さはどうか」「この痛さはどうか」というような表現(いわゆる転生名詞の「赤さ」「痛さ」)の倒置したものと見することもできる。現在は上述の3実例のような形式で定型表現化しているものとも思われるが、もし倒置されたものであれば、当該3例は「サ詠嘆法」ではないということになる。
 「-サ」に助詞ワが後接する実例はこの3例のみであり、他の話者からは聞かれない。管見

によれば、このような実例はこれまで報告されたこともなく、文法的特質や表現的特質についての詳細は不明である。これまで挙げてきた、「サ詠嘆法」の「-サ」に文末助詞の後接する実例とは明らかに性質の異なるものであるため、当該3例についての分析は今後の課題として、本稿の分析対象には含めないこととしたい。

7. β_1 型の「サ詠嘆法」の整理の最後に、倒置された例について見てみよう。先行研究においては、住田（1986）に見られる「オー ツヨサー。アンター」が唯一の例である。しかし、この「アンター」は呼びかけとも考えられ、倒置の例であると断定し難い。臨地調査によって得られた実例の中で倒置かと思われるものは、以下の6例のみである。

(157) オー 高サー。コノテレビノ。[おお 高いこと！ このテレビの。] (H1929M)

(158) ウツクッサー。アノ山ノ。[美しいこと！ あの山の。] (N1931M)

(159) アー ウツクッサー。山ノ。[ああ 美しいこと！ 山の。] (K1927M)

(160) セカラッサー。蠅（ハイ）ノ。[うるさいこと！ 蠅の。] (K1935F)

(161) 良サー。ソン洋服ノ。[良いこと！ その洋服の。] (K1929M)

(162) (他人が持っている器械の値段を聞いて) 高サー。ソラー。[高いこと！ それの。] (N1923M)

このように、「サ詠嘆法」において倒置の例は非常に出現しにくいと言えよう。これらの倒置を元の形に戻したとすると、(162)を除く全ての例が「サ詠嘆法」の典型的な形式、すなわち、体言と「-サ」とを助詞ノ（ン）が結ぶ形であることがわかる。(162)もそれに準じるものである。ここにも「サ詠嘆法」の文法的・表現的な特質が現れているものと思われる。

参考文献

- 秋山正次（1983）「8 熊本県の方言」『九州地方の方言』講座方言学 9 国書刊行会
 岡野信子（1983）「3 福岡県の方言」『九州地方の方言』講座方言学 9 国書刊行会
 小野志真男（1983）「4 佐賀県の方言」『九州地方の方言』講座方言学 9 国書刊行会
 九州方言学会（1969）『九州方言の基礎的研究』風間書房
 真田信治（2000）『脱・標準語の時代』小学館
 島原第一尋常高等小学校編（1932）『島原半島方言の研究』（1975）全国方言資料集成・第二期復刻
 国書刊行会
 白石壽文（1983）「九州方言と国語教育 — 熊本県八代市二見町方言を資料として、ことばを見つめる指導 —」『九州地方の方言』講座方言学 9 国書刊行会
 住田幾子（1986）「肥筑方言に見られる心情訴え文について」『日本文学研究』22 pp.1-10 梅光女学院大学
 濱中誠（2000）「佐賀県武雄市における「サ詠嘆法」の実態報告」『都大論究』第37号 pp.28-38 東京都立大学国語国文学会
 濱中誠（2002）「熊本県下益城郡松橋町における「サ詠嘆法」の実態報告」『都大論究』第39号 pp.29-45 東京都立大学国語国文学会
 濱中誠（2012）「「サ詠嘆法」の研究史とその問題点 — 文法的特質に着目して —」『西山学苑研究紀要』第7号 pp.1-20 京都西山短期大学
 濱中誠（2014）「「サ詠嘆法」の文法的特質 — 一語文の実例を中心に —」『西山学苑研究紀要』第9号 pp.81-96 京都西山短期大学

山田孝雄（1908）『日本文法論』宝文館出版

※本稿は、2008年に大阪大学に提出した博士学位論文『肥筑方言における「サ詠嘆法」の記述的研究』第3章「サ詠嘆法」の実態とその特質」の一部を再検討の上、書き改めたものである。